



《発掘調査の概要》

纏向遺跡の居館域の調査（纏向遺跡 166 次調査）

1. はじめに

この度、桜井市教育委員会では桜井市大字辻 63-1 番地において纏向遺跡の範囲確認調査を実施しました。この調査は平成 20 年度から着手しました範囲確認調査の一つであります。調査にあたりましては今回も土地所有者や地元関係者の方々から多大なご協力をいただきました。この場を借りて記して御礼申し上げます。

さて、今回の調査地は昭和 53 年度と昨年度に発掘調査を実施し、東西 4.8 m×南北 1.3 m 以上の建物 A や一辺 5.2 m×4.8 m の建物 B、遺構の性格は不明ですが、建物あるいは柵の可能性が考えられた 3 基の柱穴で構成された南北 6 m 以上の規模を持つ柱列 G、建物 B を囲む柵列などが確認された纏向遺跡第 162 次調査地（辻 64-1 番地）の東隣接地にあたります。

第 166 次調査は第 162 次調査で検出された遺構群より東側の遺構の様子を解明するために実施されたもので、調査期間は平成 21 年 9 月 1 日～平成 21 年 12 月 28 日まで実施されました。なお、調査面積は約 390 m²となります。



写真 1 調査地全景（西より）

黄色い柱が建物の柱跡で白い柱は柵の柱跡を示しています。



2. 調査地の位置と環境

調査地は標高 75 m 前後の東側から派生する扇状地上の微高地にあたります。この微高地は太田北微高地と呼ばれるもので、微高地の南北には旧河道が流れていた事が判明しており東西に長く南北に存在する谷部分より約 2 m 高い地形を形成しています。周辺は纏向遺跡内でも比較的古い段階（3 世紀前半・庄内式期）の遺構が密集して分布する地域であり、過去に行われた調査においても庄内式期を中心とした多くの遺構が確認されています。

3. 検出された遺構

今回の調査では第 20・162 次調査の調査成果を受けて上層では 3 世紀後半の遺構面となる包含層Ⅲ上面と、包含層Ⅲの下部において確認検出された 3 世紀前半の遺構面となる地山及び整地層上面の 2 面において調査を行う予定でしたが、166 次調査区内には包含層Ⅲが部分的にしか存在しなかったため上層遺構面の調査を断念し、地山及び整地土上面での調査を実施することとなりました。なお、現時点では 162 次調査地と同様に整地層より下部にも下層遺構に先行する遺構が存在することが判明していますが、これについては調査途中であり、ここでは下層遺構面の遺構の状況について見てゆくこととします（図 2）。

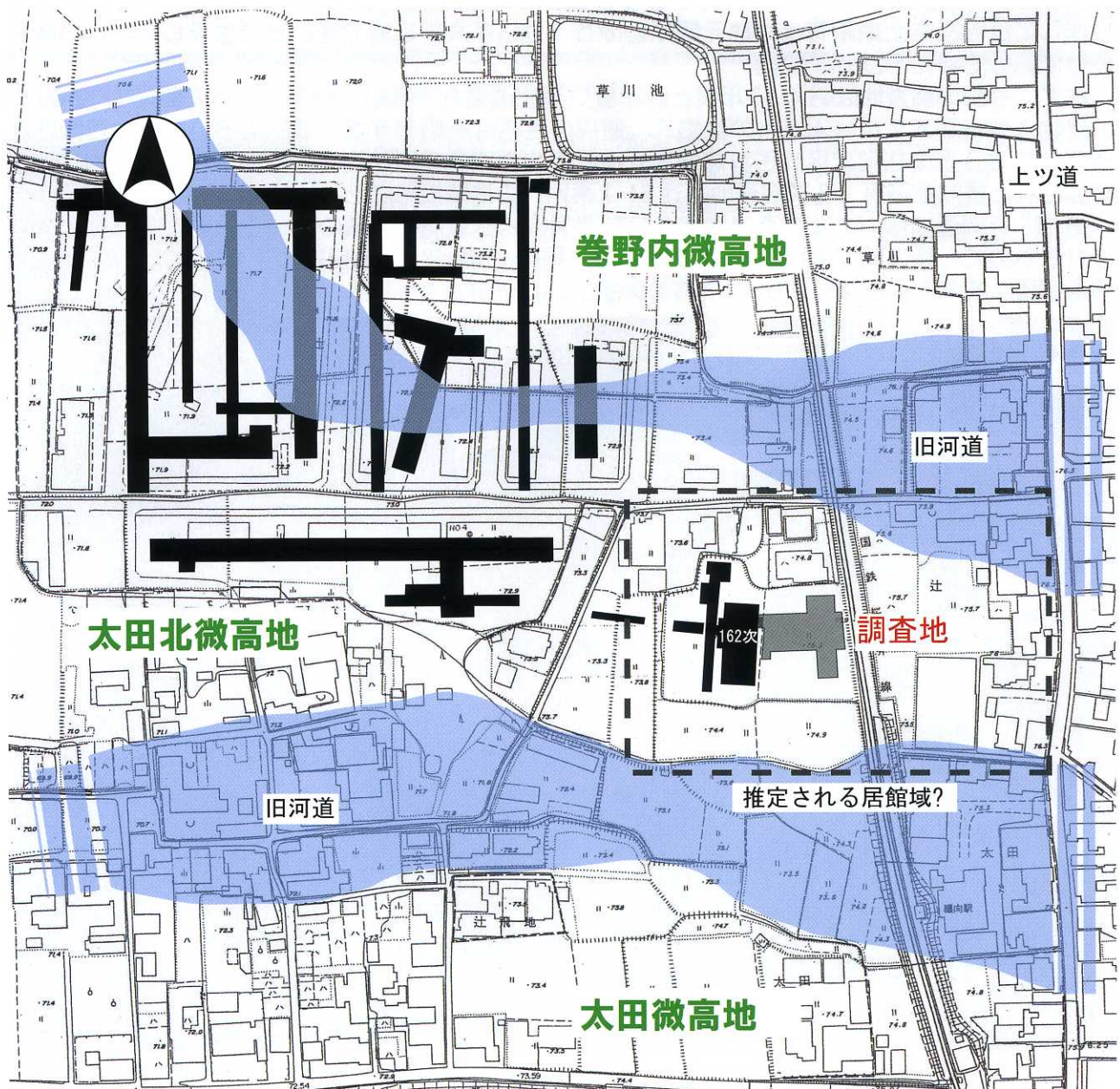


図 1 調査地位置図 (1/2,000)



今回の調査と第20次・第162次調査の遺構配置図

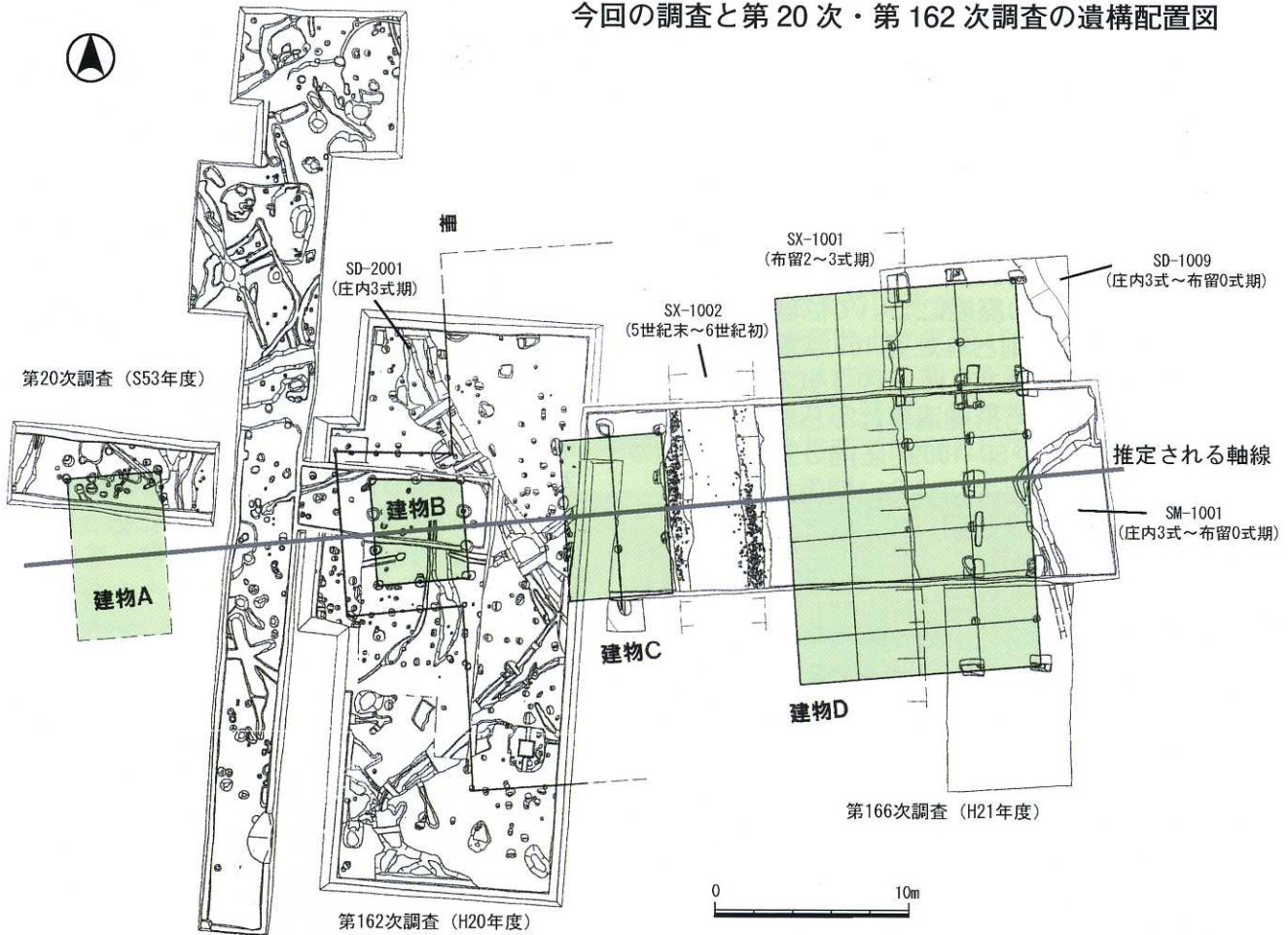


図2 遺構配置図

遺構面の状況 3世紀前半段階の遺構が存在する下層の遺構面は大きく分けて黄褐色粘質土（地山）・黄褐色粘質土ブロックを多く含んだ灰褐色土（整地土）の2つの土壌から構成されています。調査区の東部、方形区画溝の周辺から南にかけては本来調査区内では最も地形の高い地点に位置していたとみられ、遺構面には黄褐色粘質土の地山が一部露呈しています。

建物C 調査区西端部において検出された建物遺構で昨年度の調査で柱列Gとしたもので、建物Bとの距離は5.2mあります。この建物は東西面南端の両柱穴が失われているため正確な規模は不明ですが南北の両近接棟持柱が検出されており、3間×2間（南北約8m、東西5.3m）の規模を持つものであることが判明しています。

建物D 調査区東半部において検出された南北4間（19.2m）×東西2間（6.2m）以上の建物遺構です。本来の建物規模は調査の状況や建築学的な検討から東西も4間であったと考えていますので、南北長19.2m×東西長12.4mの規模に復元しています。なお、この復元案による建物Cとの距離は6.4mです。

柱穴の平面プランは一辺1m角のものから1m×1.7mのものなど大きくばらつきがありますが、すべてが方形・もしくは長方形のプランを持っていました。柱穴の深さは15cm～70cmとばらつきがありましたが、これらは後世に一定の削平を受けたものと考えており、多くは残存する深さ15～30cm前後のものです。

また、柱材は総て抜き取りが行われ、柱穴内には残っていませんでしたが残された柱の痕跡からその太さは32cm前後のものと推定されます。主柱の柱間は南北間で4.8m前後、東西間で3.1m前後になると考えていますが、南北の主柱穴間のほぼ中央には径40cm前後、柱の太さ約15cmの円形柱穴が検出されており、建物の床を支える束柱であった可能性が高いと考えています。



4. 遺構の時期

各遺構の所属時期については調査途中の現時点では土器資料の整理が終了していないため、厳密な時期を導き出すのは困難な状況にあります。

しかしながら、これまでに得られた知見では整地土の造成及び建物C・Dの構築は3世紀前半の庄内式期古相段階に行われたものと考えています。

そして、建物群の廃絶については建物の柱穴を切って掘削された第162次調査の溝遺構であるSD-2001(庄内3式期)や第166次調査の方形周溝墓とみられるSM-1001・溝遺構のSD-1009(庄内3式～布留0式期)などとの切り合い関係から3世紀中頃(庄内3式期)を含めてそれ以前と考えています。



写真2 建物C全景(南東より)
A Bが近接棟持柱です。

5. まとめ

今回の調査では第162次調査でその一部が確認されていた建物Cの全容と、その東側に展開する建物Dの構造について様々な新しい知見を得ることができました。これらの知見を順に挙げてみると、

1. 第162次調査で検出されている柱列(柵)の内側に、より規模の大きな建物が複数棟存在することが判明しました。これまでの調査によって柱列(柵)で囲まれた範囲は纏向遺跡の居館域の内郭にあたるものではないかと考えられていましたが、今回の調査ではその範囲を確認することはできませんでした。今回の調査状況から推定するとその範囲はさらに東方へと広がっていくものと予想されます。

2. 今回確認された建物C・Dもこれまでに確認されている建物A・Bや柱列(柵)などと方位およびその軸線を揃えて構築されている事が判明しました(図2)。推定される建物群の軸線は東西方向に通るもので、方位は建物・柱列(柵)などすべての構造物が真北に対して約4～5度西に振れた方位に揃えて建てられています。これらの建物・柱列(柵)は構築された時期やその廃絶も期を同じくするとみられることから、一連の遺構は明確な設計図に基づいて、強い規格性を持って構築されたものと判断されます。

3. これまでの周辺の調査成果から推定すると、これまで一連の調査対象となった微高地上が3世紀前半代に纏向遺



写真3 建物D全景(南より)
黄色い柱が建物の柱跡で、AからDが建物の四隅の柱です。



写真4 建物D東南隅の柱穴(南より)
土の堆積を調べるために半分だけが掘られています。

跡の中心的な人物がいた居館域であったと考えてほぼ間違い無いと思われま

す。
4. 建物Dの復元規模は4間四方の南北19.2m×東西12.4m、床面積238.08㎡と3世紀中頃までの建物遺構としては国内最大の規模を誇るものとなりました。現時点の考古学的な状況だけでは建物の性格は判然としませんが、その規模から推定するに居館域における中心的な役割を果たす建物の一つと考えています。

これらの事柄を総合すると、これまでに検出された建物A～Dや柱列(柵)の存在からは方位や軸線を揃えた建物が東西に4棟連続して構築されていたことが判明しました。また、個々の建物を比較すると柱列(柵)の内と外ではその規模や密度に明確な違いが認められることから、柱列(柵)を境に建物の重要度に違いがあると考えています。

また、周辺の微地形や残された地割の観察からは太田北微高地上に東西150m×南北100m前後の居館区画が存在する可能性が考えられており、その内部は柱列(柵)を境として内郭と外郭に整然と区画されていたものと思われま

す。このように複雑かつ整然とした規格に基づいて構築された建物群の確認は国内でも最古の事例となるもので、これまでに判明している弥生時代の大型建物などとは完全に一線を画する構造を持つものです。
なお、今回明らかとなってきた纏向遺跡の古墳時代前期初頭の居館構造には未だ明らかにされていない飛鳥時代以前の大王や天皇の宮などの原形があると考えられることから、周辺地区における一連の調査は、我が国の国家の形成過程を探る上で極めて重要な意義を持つものと言えるでしょう。

今後も関係各位のご協力のもと、更に周辺地区の調査を推進し、居館内の構造や個々の遺構の性格を明らかにしていきたいと考えています。

(橋本輝彦)



写真5 建物群の様子

162・166次調査地を合成したものです。

《検出された建物の復元》

これまでに検出された建物群は神戸大学大学院工学研究科の黒田龍二先生にお願いし、調査で作成した遺構平面図などをもとに上部構造の復元案を検討していただきました。図3・4に示しているのは黒田先生が作成された復元案をもとにNHKおよび旬タニスタさんにコンピューターグラフィック(CG)で当時の建物の様子を再現していただいたものです。

現地に残された柱穴の状況だけではなかなかイメージが湧きにくい建物の様子がこのCGをみるとより具体的なものとしてご覧いただけるようになりました。このCGは今後も調査の進捗に合わせて周辺の遺構を随時追加・更新していく予定です。調査が進んだ数年後にはどのような居館の姿があらわれてくるのでしょうか、お楽しみに……。



©NHK / タニスタ 監修：黒田龍二

図3 建物群の復元イメージ図(1)



©NHK / タニスタ 監修：黒田龍二

図4 建物群の復元イメージ図(2)

● 纏向遺跡 166 次調査の現地説明会が開催されました！ ●

平成 21 年 11 月 13 日に地元の住人の方々を対象に、14・15 日には一般の方を対象として纏向遺跡第 166 次調査の現地説明会を開催しました。13 日の地元説明会には 700 人、14 日は明け方からあいにくの雨模様でしたが 3,600 人、15 日は 7,700 人とのべ 12,000 人ものの方々にご来跡頂きました。調査地のスペースの関係上、一度に現地を御見学頂けたのは 300 人程度で、2 時間近くお待ちいただいた方も多く、ご迷惑をお掛けしましたが盛況のうちに、終わることができました。また、今回も調査に参加頂いた俳優の苅谷俊介さんには長時間お待ちになられた見学者のお相手から、誘導・説明など多岐にわたって献身的なお手伝いをして頂きました。記して感謝申し上げます。



図 6 説明会の様子 (1)



図 7 説明会の様子 (2)

《調査トピックス》

箸墓古墳周濠の調査（纏向遺跡第 163 次調査）

被葬者像をめぐる議論が絶えない箸墓古墳は、今や日本中で最も注目される古墳の一つであると言っても過言ではないでしょう。しかし残念なことに、現在は墳丘部分の調査・立ち入りが許されていません。厚いベールに包まれたその姿は、多くの研究者の妄想をかきたててきました。そうした中で実施される墳丘周辺の発掘調査は、われわれの欲求を満たしてくれる貴重な機会となっています。

箸墓古墳周辺の調査は、平成 21 年度の第 163 次調査を含めると 19 次を数えます。こうした地道な調査の積み重ねにより、古墳の周囲にめぐらされた周濠（内濠）と、その外側を取り巻く外濠状遺構の存在が明らかになっています。

第 163 次調査においても外濠状遺構が検出されています。前方部南側で確認されたのは今回がはじめてであり、その幅は 50 m 以上に及ぶ大規模なものでした。

また、その外周部分が、盛土により整備されていることも明らかになりました。

ベールの奥に思い焦がれて、実施してきた調査は 19 回。蓄積された調査成果は、日本列島で最初の大王の墓にふさわしい、箸墓古墳の壮大な全容を浮かび上がらせました。

それでも研究者の欲求は、尽きることはありません。これからも調査は果てしなく続くことでしょう。「卑弥呼の墓」で決まり！となるのはいつのことでしょうか・・・。（福辻淳）

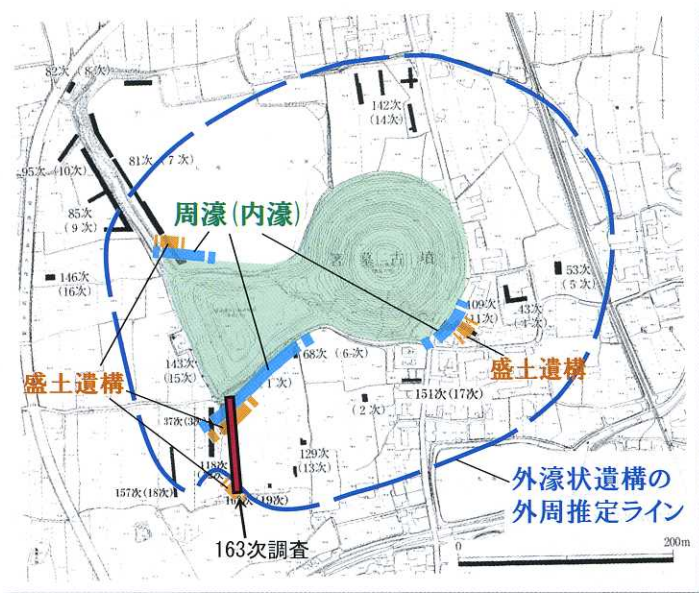


図 5 箸墓古墳周濠推定図

5世紀の前方後円墳だった堂ノ後古墳（纏向遺跡第164次調査）

前号で紹介した大字箸中で行われていた堂ノ後古墳の調査の成果を紹介します。当古墳がホケノ山古墳（3世紀中頃）のすぐ西隣にあるということから、最古級の古墳のひとつか!?!と期待されていた堂ノ後古墳ですが、調査の結果、5世紀後半に築造された前方後円墳であることが判明しました。調査では、古墳の前方部及び周濠、転落した葺石を確認し、周濠の埋土からは鶏形埴輪の頭部、円筒埴輪片、須恵器などが出土しました。

期待されていた成果と少し異なりますが、当地域ではいわゆる纏向遺跡衰退以後の5・6世紀にも多くの古墳が築かれ、再び豪族達がマキムクの地に住み始めたことは間違いありません。その中でも堂ノ後古墳は比較的規模が大きく、いったいどのような人物が葬られていたでんしょうか?興味がそそられます。

今回の成果はその一端を知る手がかりで、いわゆる「纏向時代（3世紀）」以後の動向も目が離せません。

ちなみに担当者であった金松君は調査後すぐに、兵庫県三木市の文化財担当職員として正式採用され、桜井を旅立ちました。これまでの経験を活かして、三木市での大活躍を期待しています!!

（丹羽恵二）



写真8 葺石の転落状況
奥の土の高まりが前方部の側面です



写真9 出土した鶏形埴輪（雄）

古墳ではなく、建物跡を発見（纏向遺跡第165次・167次調査）

纏向遺跡第165次・167次調査は大字巻野内地内、昭和60年に実施した第42次調査地の西隣で行われました。この42次調査では4世紀の形象埴輪や朝顔形埴輪が出土し、このあたりに古墳がある可能性が考えられました。今回はこの古墳の存在を示すような周濠や埴輪などの遺構や遺物が出土することが期待されましたが、第165・167次調査ともに見つかりませんでした。

第165次調査では、3～4世紀頃の遺物が出土した大溝が見つかりました。

第167次調査では奈良時代～平安時代の土器が出土した掘立柱建物跡が見つかったほか、井戸の可能性のある土坑や瓦がまとまって出土したピットなども見つかりました。165次調査でも奈良時代～平安時代の土器が出土しています。

また、近くにある九田寺には、同じ時代と考えられる石灯笼の一部があることから、今回見つかった建物跡が古代寺院に関係するものである可能性があり、今後の調査が期待されます。

（武田雄志）



写真10 第165次調査
トレンチ全景（東から）



写真11 第167次調査
トレンチ全景（北から）



《纏向遺跡を掘る調査員たち》

今回から数回に分けて桜井市域における遺跡の調査を担当する調査員たちを紹介します。調査成果以外にはあまり知る機会のない発掘調査の舞台裏ですが、遺跡の調査はどんな人物が担当しているのか、皆さんに知って頂けるよう自己紹介してもらいます。第1回目は桜井市教育委員会の嘱託職員として調査を支えてくれている福家・武田の両君です。



福家恭（ふけ たかし） 小豆島出身の26歳、O型です。
皆様こんにちは。纏向遺跡第162・166次調査を担当していた福家です。次の調査では何か遺物で凄いものが出土したらいいなと、密かに期待をしています（笑）。私は大学生の頃から、纏向遺跡の未調査古墳の調査してきたこともあり、この纏向の地に何かと縁を感じている今日此の頃、ここ桜井市に来て三年目になりました。まだまだ新前のつもりで、何事にも日々精進していきたいと思っておりますので、今後どうぞよろしくお願いいたします。

武田雄志（たけだ ゆうじ） 和歌山県出身の31歳、B型です。
奈良大学大学院文化財史料学専攻博士前期課程修了。家業は漁師ですが、船酔いするため家業を継ぐことを断念しました。その頃、とある展覧会で島根県荒神谷遺跡出土の青銅器を見たことをきっかけに考古学に興味を持ち、その影響から弥生時代の青銅器とその鑄型を主な研究対象としています。フリーターなどの紆余曲折を経て、2009年桜井市に拾われ、現在に至りました。纏向遺跡では第165・167次調査を担当しています。



埋蔵文化財センター展示室からのお知らせ



埋蔵文化財センター展示収蔵室では6月20日までの会期で平成21年度企画展示『大桜井展～発掘調査40年の軌跡～』を開催しています。桜井市内の遺跡には地域の歴史にとどまらず国の歴史を考える上で重要な位置を占めるものが数多く存在しており、これまでに行なわれた発掘調査からは沢山の特筆すべき遺物が出土しています。

今回の企画展示は桜井市教育委員会が所蔵する遺物の中から特に重要なものを厳選し、時代を問わず一堂に展示する事となりました。

すでに行なわれている様で、今まで行なわれたことの無い埋蔵文化財センター開館以来のはじめての企画となりますので、ぜひご観覧ください。
開館時間 9:00～4:30 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日（祝日は開館いたします。）

入館料 / 大人 200円 小・中学生 / 100円 市内の小・中学生は入館無料
(20名以上の団体は大人 150円 小・中学生 50円)

刊行物のご案内

埋蔵文化財センターでは纏向遺跡をもっと知りたい方のために以下の図書を頒布しています。

ガイドマップ『改訂第3版 纏向遺跡へいこう!』200円 (2010年2月に新版を刊行しました。)

纏向遺跡の概説書『ヤマト王権はいかにして始まったか』500円

『纏向石塚古墳第1期整備事業 範囲確認調査(第5次～第7次)概要報告書』900円

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内 (助) 桜井市文化財協会までお問い合わせください。

編集後記

纏向遺跡の居館を探る第166次調査の成果報告を中心として第2号を刊行する事ができました。今号の作成にあたっては他の纏向遺跡の調査成果についても実際に調査を担当した埋蔵文化財センターの職員諸氏に原稿執筆についての協力を得、随分と助けてもらいました。次号は今夏に予定されている学術調査の成果を盛り込んで初冬に刊行の予定です。御期待下さい!!

(teru)

纏向考古学通信 Vol.2

発行 平成22年6月1日

第2刷 平成23年9月1日

編集 桜井市立埋蔵文化財センター

〒633-0074 奈良県桜井市芝 58-2

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

